

## 記号に注意する

### 記号受容における限定された注意力をめぐる問題について

谷島貫太（二松学舎大学）

#### 発表要旨

##### 要旨本文

ある記号が受容され、解釈されるためには、まずその記号に注意が向けられなければならない。注意が向けられなければ、記号はそもそも記号としてすら認知されないからだ。この当たり前すぎる事実は、記号学の議論のなかでそれほど強く意識されてきたとは言えない。記号をめぐる知は、多くの場合、記号についてすでになんらかの形で注意が向けられていることを前提とし、「記号学の冒険」はその次の段階から始まるとされてきた。

経済学はながらく、無限の認知能力を持ちつねに経済的にもっとも合理的な判断を下す経済人（ホモ・エコノミクス）を前提として理論を組み立ててきた。この理論的前提は現在、人間の認知能力の有限性から出発し、限定合理性にもとづいて経済の動きを分析しようとする行動経済学によって批判されている。同様の批判が記号学に対してもある程度行われてしかるべきだろう。大部分の記号学の前提とは異なり、人間の記号活動は限られた注意力、いってみれば限定注意性 bounded attentionality にもとづいて行われている。この事実に立脚したうえで、記号学の可能性の条件について改めて再考する必要がある。

本発表では、チャールズ・サンダース・パースの記号論を換骨奪胎して独自のコミュニケーション学を展開しているダニエル・ブーニューの指標性論を入り口として、記号受容における注意の問題を検討する。加えて、ブーニューの議論をベースの一つとして展開された石田英敬らの「テレビ記号論」、またブーニュー、石田がともに下敷きとしているローマン・ヤコブソンの六機能図式における「接触」概念の再検討を通して、記号受容における注意の問題が、記号を支えるメディアの問題と直結していることを示していく。

#### 参考文献

ブーニュー, D (2010) 『コミュニケーション学講義 メディオロジーから情報社会へ』水島久光監訳、西兼司訳、書籍工房早山。

ジュネット, G (2001) 『スイユ テキストから書物へ』和泉涼一訳、水声社。

石田英敬 (2020) 『記号論講義 ―日常生活批判のためのレッスン』ちくま学芸文庫。

ヤコブソン, R. (1984) 『言語とメタ言語』池上嘉彦／山中桂一訳、勁草書房。

水島久光 (2008) 『テレビジョン・クライシス―視聴率・デジタル化・公共圏』せりか書房。

西兼志 (2016) 『〈顔〉のメディア論: メディアの相貌』法政大学出版局。

パース, C.S (1986) 『パース著作集 2 記号学』内田種臣編訳、勁草書房。